

近畿大学 総合社会学部 総合社会学科 環境・まちづくり系専攻 農村計画・地域デザイン研究室

Rural Planning & Design Unit : NODA_Laboratory ,
KINDAI University

2022.04発足 | B4 (1期生) 9名 | B3 (2期生) 12名



自己紹介



氏 名 | 野田 満 Mitsuru NODA

生年月日 | 1985.09.11 (38歳)

出 身 | 兵庫県神戸市 (旧本籍：兵庫県淡路市)

学 位 | 博士 (工学) 早稲田大学

専 門 | 農村計画 | 主に農山漁村 (ムラ・イナカ) を対象に、地域の文化や環境を現代社会に調和させながら、空間や社会、経済等に関する課題を解決していく為の「計画」≡仕組みや仕掛け、施策、制度、プロセス等を組み上げる学問

地域デザイン | 広義のデザイン概念に則り、①地域に存在する有形無形・可視不可視のデザインを見出し活かす為の学問、及び②地域に存在する諸問題をデザインによって解決する為の学問

その他、建築、都市計画、観光、芸術、等

授 業 | 人文地理学1 [B2後期 | 2024開講]、地域経済論2 [B3前期 | 2022開講]

特別講義4：農村計画・地域デザイン論 [B3後期 | 2022開講]、等

現 在 | 近畿大学総合社会学部総合社会学科環境・まちづくり系専攻 講師 (2022-)

野田満研究室 (農村計画・地域デザイン) 主宰

さんそデザイン共同代表 (2021-)

地域研究ユニットタテマエ主宰 (2018-)、等

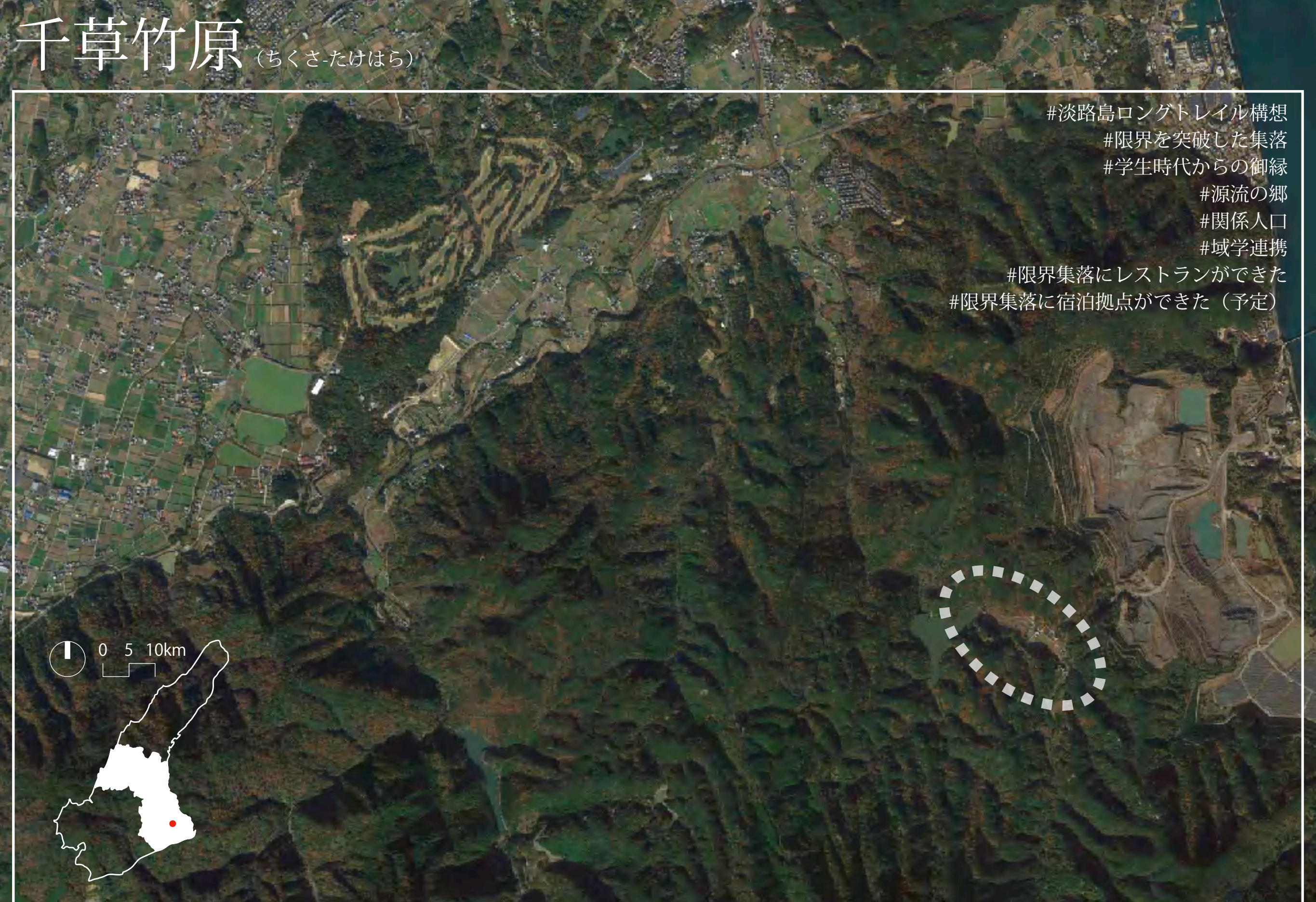
経 歴 | 東京都立大学都市環境学部 (2017-2021)

福井大学産学官連携本部 (2016-2017)

島根県中山間地域研究センター (2015-2016)

趣 味 | 読書、登山／ブッシュクラフト、妄想

Keyword | メタフィジカル・農村計画学研究、デザイナーなしのデザイン、ものづくり、有限制作
集落空間、耕作放棄地、住民自治、ふるさと納税、クラウドファンディング、超芸術
現場主義、実践主義、パラレルワーク、知的体力、ブリコラージュ、終わりのデザイン
独立起業、域学連携、二地域居住 (大阪⇄淡路島)、フィールドワーク、ダダイズム
公私混同→公私融合→公私調合、創造的破壊、実践的研究×研究の実践、ダイアグラム
関係人口、地域おこし協力隊、子ども食堂、地域通貨、姉妹都市、観光むらづくり



千草竹原 (ちくさ-たけはら)

- #淡路島ロングトレイル構想
- #限界を突破した集落
- #学生時代からの御縁
- #源流の郷
- #関係人口
- #域学連携
- #限界集落にレストランができた
- #限界集落に宿泊拠点ができた（予定）

洲本市の南東、山間部の袋小路に位置する集落。人口・世帯数共に1ケタの限界集落ながら、域学連携をはじめとする交流・関係人口を伴う地域づくりを積極的に推し進める「限界を突破した集落」として知られる。



淡路島ロングトレイル構想

#里山資源のコンバージョン
#維持管理体制の仕組みづくり
#歩くアワイチ
#趣味や興味で繋がる関係人口

撮影 | 野田満 | 兵庫県洲本市、2023.09



淡路島ロングトレイル構想

#里山資源のコンバージョン
#維持管理体制の仕組みづくり
#歩くアワイチ
#趣味や興味で繋がる関係人口

撮影 | 野田満 | 兵庫県洲本市、2023.05

近畿大学農村計画・地域デザイン研究室

関係人口としての大学・企業の座談会：地域づくりに関わるヨソモノたち
Mitsuru NODA



淡路島ロングトレイル構想

#里山資源のコンバージョン
#維持管理体制の仕組みづくり
#歩くアワイチ
#趣味や興味で繋がる関係人口

撮影 | 野田満：兵庫県洲本市、2023.05

鮎原宇谷 (あいはら-うだに)

#宇谷の未来を創る会
#小豆島の絶景
#地酒・総濠利
#脱輪注意
#コンビニ近い
#関係人口
#直売所
#ウダニマン
#いつか教科書になるムラ
#地域おこし協力隊



洲本市の概ね中央、県指定記念物の山砦・白巣城跡の麓に位置する集落。有史以降かたちを変えず残存する地形や農地割は島内でも珍しく、淡路島の貴重な原風景としてその美しい佇まいを継承してきた。人口55人、22世帯（2015年度国勢調査に基づく）。

鮎原宇谷地区移住&むらづくり読本

#移住＝単なる引越しでは無い
#移住者トラブルの原因の殆どは「暗黙の了解」関連
#良いことも悪いことも明文化
#情報の集約・共有・公開でトラブルを未然に防ぐ

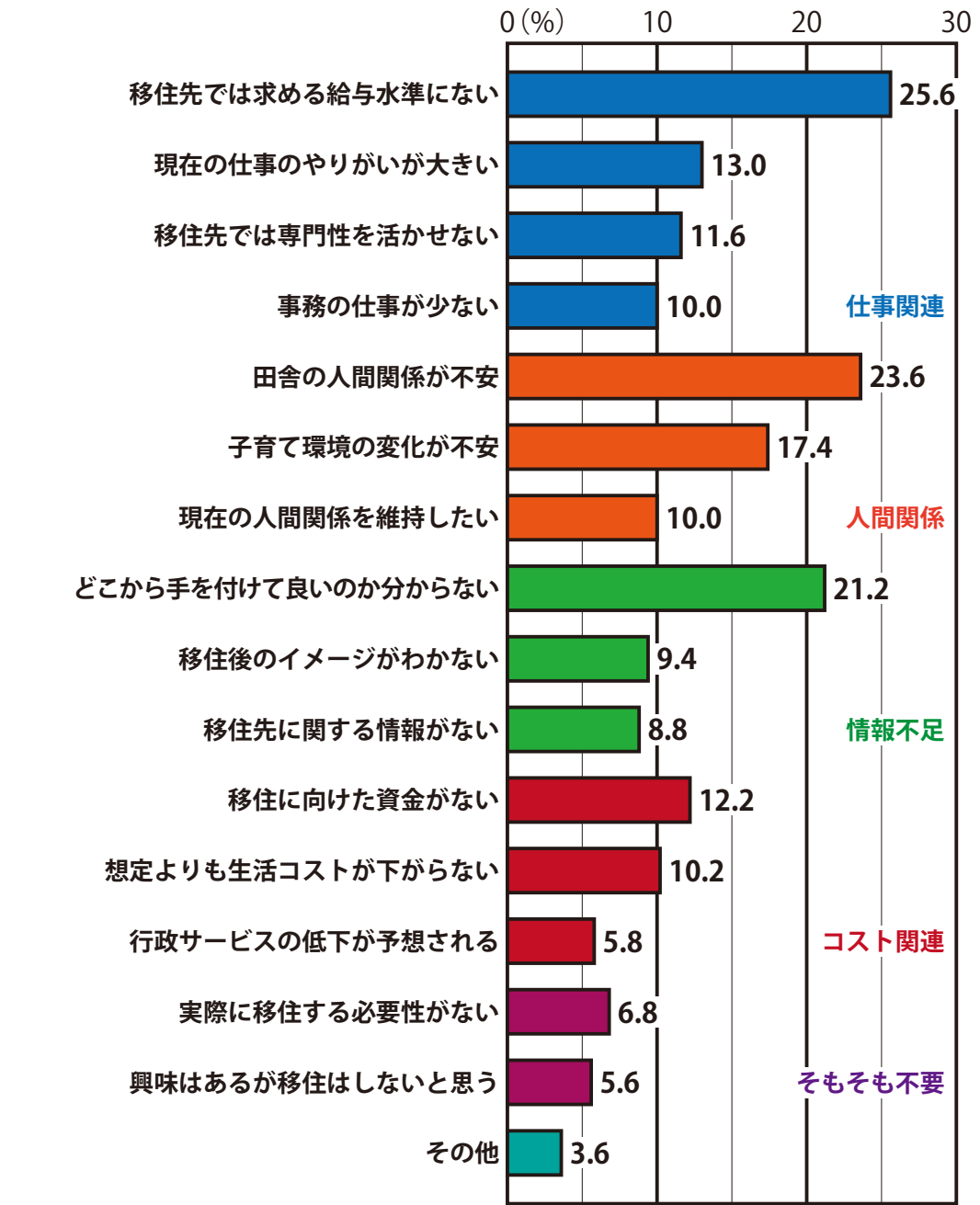


図 地域への移住を妨げる要因 ※引用文献より加筆修正



図 兵庫県洲本市宇谷地区移住&むらづくり読本（近畿大学野田満研究室 | 2022）

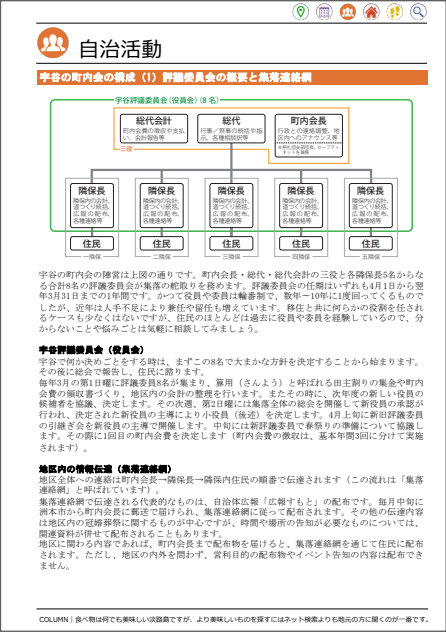
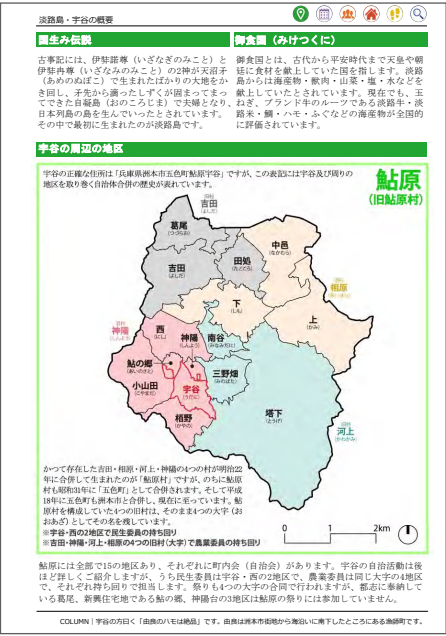


図 兵庫県洲本市宇谷地区移住&むらづくり読本（近畿大学野田満研究室 | 2022）

可逆的／動的な計画づくりの為に | 2022年に野田研究室で制作。公的情報では得られない当該地区の諸情報（いわゆるローカルルール）をあらかじめ移住検討者に伝えておく為のメディア。モデルとなった「集落の教科書」は京都府等で幾つかの制作事例があるが、本書のオリジナル要素として「移住関連のみならずむらづくり全般の情報を掲載」した上で、地元自らで能動的に更新し続けられるよう「製本ではなくバインダー綴じ」の永遠のβ版仕様としている。

鮎原宇谷地区移住&むらづくり読本

#移住＝単なる引越しでは無い
#移住者トラブルの原因の殆どは「暗黙の了解」関連
#良いことも悪いことも明文化
#情報の集約・共有・公開でトラブルを未然に防ぐ

兵庫県洲本市

あい は ら う だ に

鮎原宇谷地区 移住&むらづくり読本



はじめに

本書「鮎原宇谷地区移住&むらづくり読本」は、宇谷への移住を検討している方や、地域づくりに関わる方に向けた、手引き書のような冊子です。暮らしの様子や、自治活動の一員としての役割について等、宇谷という集落を分かり易く解説した内容となっています。京都府で作成された「集落の教科書」の事例を参考に、2023年3月に「初版」が作成されました。

初版以降は地元の手で更新・改善していくことを想定し、本書は「バインダー形式・片面印刷・ページ番号無し」で編集されています。例えば新しい年間イベントをつくった時、集落のルールを改変した時、語り継ぐべき歴史や慣習が見つかった時…、その度にページが増えたり、変わったりしていくこともまた、地域づくりのいち成果でもあります。子どもの成長記録のアルバムのように、宇谷という集落と一緒に本書も皆様の手で育ててほしいという思いがあります。

宇谷への移住を検討している方は、本書で暮らしのイメージづくりや、移住に向けた準備、集落の住民への事前相談等に役立てていただけたら幸いです。

宇谷の地域づくりに関わる方（関わってみたい方）は、これまでの宇谷の略歴や、これからの宇谷が目指しているビジョンや取り組みについて、本書を参考にして頂けると幸いです。

目次



淡路島・宇谷の概要



宇谷カレンダー



自治活動



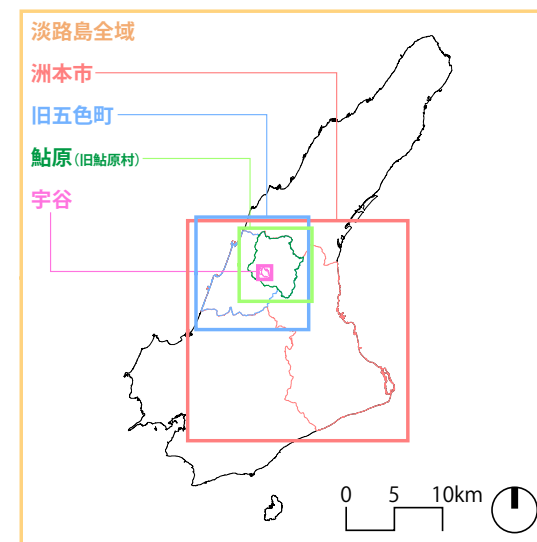
宇谷での生活



宇谷の歴史と伝統



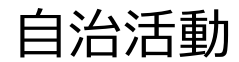
移住を検討している方へ



本書に記載している地図は、その内容によって範囲が異なります。上記の各スケールに対応した枠の色で表記していますのでご注意ください。

- #移住＝単なる引越しでは無い
- #移住者トラブルの原因の殆どは「暗黙の了解」関連
- #良いことも悪いことも明文化
- #情報の集約・共有・公開でトラブルを未然に防ぐ

#移住＝単なる引越しでは無い
#移住者トラブルの原因の殆どは「暗黙の了解」関連
#良いことも悪いことも明文化
#情報の集約・共有・公開でトラブルを未然に防ぐ



COLUMN | 食べ物は何でも美味しい淡路島ですが、より美味しいものを探すにはネット検索よりも地元の方に聞くのが一番です。

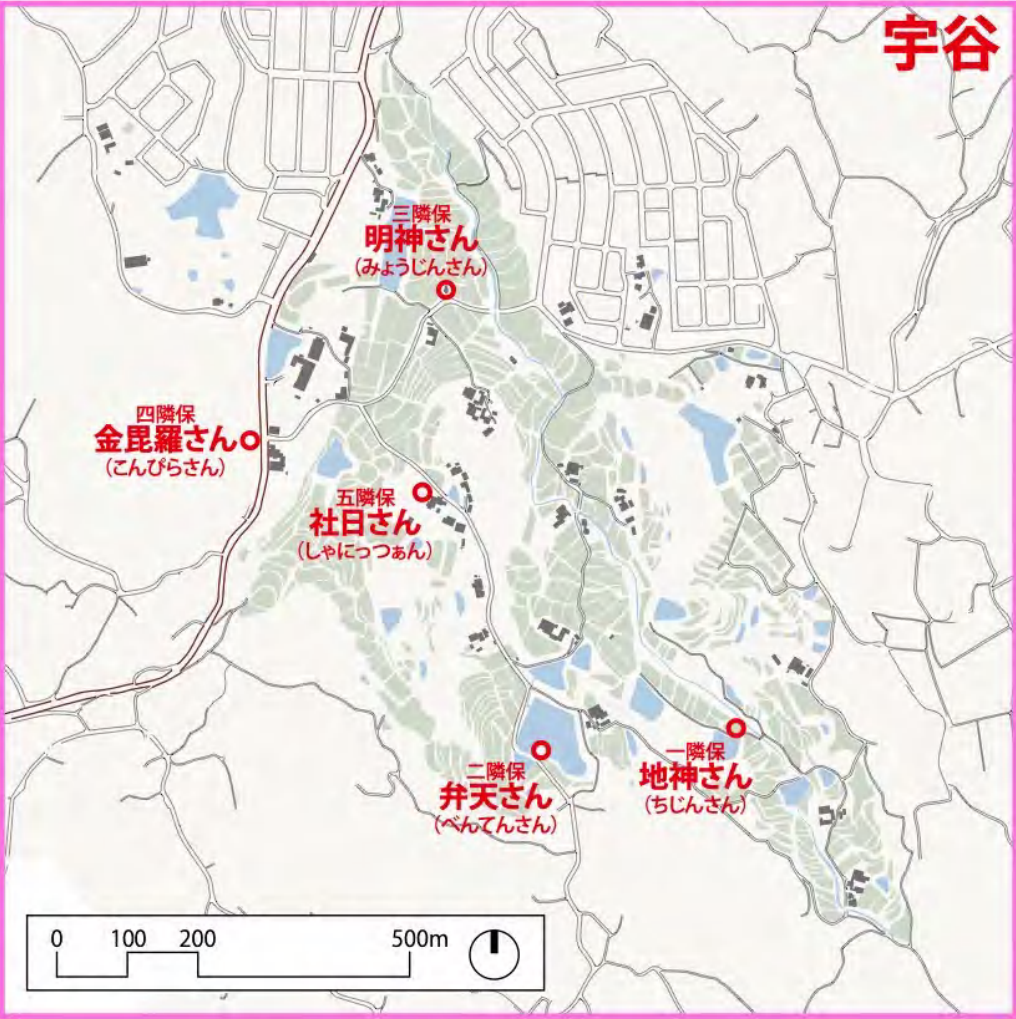
COLUMN | 淡路島のそこかしこにある溜め池は、貴重な水源であると共に昔の子どもたちの遊び場でもありました。

鮎原宇谷地区移住＆むらづくり読本

#移住＝単なる引越しでは無い
#移住者トラブルの原因の殆どは「暗黙の了解」関連
#良いことも悪いことも明文化
#情報の集約・共有・公開でトラブルを未然に防ぐ

宇谷の歴史と伝統

宇谷の5つの神様



宇谷には隣保ごとに1つ、計5つの神様が存在しており、各隣保で管理しています（宇谷には他にも「サイジンさん」や「北向地藏」といった神様もいるようです）。現在も祭りが行われているのは二隣保の明神さんと、五隣保の社日さんです。明神さんでは祭事と掃除が、社日さんでは祭事が、それぞれ5つの隣保の輪番で執り行われています。

COLUMN | 昔は明神さんのあたりに運動場があり、そこで球技大会や運動会、相撲大会などを行っていたそうです。

宇谷の歴史と伝統

宇谷の神様（一隣保～三隣保）



地神さん（ちじんさん）
一隣保の神様です。母乳の出がよくなるというご利益があり、昔は遠くの村からお参りに来る人が多かったそうです。1850年に再興されました。玉生社との別名もあります。



弁天さん（べんてんさん）
二隣保の神様です。龍雲寺の少し南、大池の近くに祀られています。弁財天は水の女神であることから、宇谷でも有数の広さを誇る大池に祀られているのではないかと考えられます。



明神さん（みょうじんさん）
三隣保の神様です。宇谷の隣保ごとの神様の中では唯一、鳥居があります。本殿に加えて、その後ろには祠も存在します。宇谷の方も小さい頃に、この明神さんの前で遊んでいたというお話もありました。別名は住吉社です。

メモ

COLUMN | かつて自分の土地だけを辿って宇谷から都志まで歩いて行けたほどの大地主がいたそうですが、その真偽は不明です。

図 兵庫県洲本市宇谷地区移住＆むらづくり読本（近畿大学野田満研究室 | 2022）（一部抜粋：8/12）

鮎原宇谷地区移住&むらづくり読本

#移住＝単なる引越しでは無い
#移住者トラブルの原因の殆どは「暗黙の了解」関連
#良いことも悪いことも明文化
#情報の集約・共有・公開でトラブルを未然に防ぐ



移住を検討している方へ 先輩住民・先輩移住者へのインタビュー

プロフィール インタビュー（2023. 03. 12実施）



堂原克太（どうはら・かつだ）さん
一隣保在住

▼今回の「移住&むらづくり読本」制作のきっかけは何でしたか？

「宇谷のみらいを創る会」のミーティングの時に野田先生から「集落の教科書」の事例を教えてもらって、宇谷でも作ってみませんかという話になってね。それでネットで調べたり、資料に目を通して。ちょうどコロナもあって時間にも余裕があったので、空いた時間に原稿を作って、先生に送った記憶はあるね。完成品のイメージは付かへんかったけど、そういう声をかけていただいたのはありがたかったし、「すごいものになるかもな」という気持ちは当時あったかな。なので積極的に進めていきました。

▼本書にもたびたび登場する「ウダニマン」の誕生秘話についても伺います。

僕自身キャラものが好きというか、地域おこしと絡めて戦隊ものを登場させる地域も多いから、先生のお話を聞きつつも（宇谷のみらいを創る会のメンバーが）5人以上いるから間違いなくできると。そして僕は悪役をやろうと（笑）。ラフ案はすぐにできたね。
「宇谷のみらいを創る新聞」を毎月更新しないといけないし、他にもやることが山ほどあったから登場は後回しにはなったけど、遊び心から入って楽しくやりたいという気持ちがありました。怪人の存在や必殺技とか、色々細かい設定もあります（笑）。

▼「宇谷のみらいを創る会」では、様々な取り組みを積極的に進められていますね。

僕が小さい時にクリスマス会があって、30年くらい前になくなったけれど、クリスマス会をもらったことはものすごく思い出に残ってるんよね。そんな思い出作りを今の子どもたちにもしてあげたいということで、まずはクリスマス会をパッとやりました。地域の助け合いも当然大事なんだけど、やっぱり子どもを大切にしたい。特に田舎はね。僕が子どもの時は地域の人みんなが家族に近い存在だったから、学校から帰ってきたら「おかえり」「まっすぐ家に帰れよ」「寄り道すんなよ」って声をかけてくれた。そういった活動をまずはしたいなあと。とにかく「創る会」ができたことがすべてのスタートであり、それ自体が最大の成果でもあるなと。1つの目的に向かってワンチームになれる会やから。僕は基本、若い人の意見に耳を傾けて、それを実現するために進めたい。昔は会社でも集落でも、若手の意見は反対されがちで、そうなるとだんだん意見が出せなくなっていくんよね。だから「創る会」は若い人が自由に意見を出せる環境をつくりたいなど。逆に「この件は事前に、この人に了解を取っておかないといかん」とか、僕らの世代だから分かることもあるので、そういうことは我々がして。

子ども向けのイベントの次は、しめ縄づくりもそうやけれど、高齢者の方々に喜んでもらえることもやっていきたいね。尚歯会の復活とか。

▼移住者の方や、いわゆる関係人口の方との関わりの中で意識していることはありますか？

難しい質問やね（笑）。地元住民と移住者と関係人口という3者のトライアングルというか、三本の矢というか、良いバランスやと思います。よその地域がどうなのかは分からへんけども、「絶対にこれをせんと駄目」と言うんじゃないしに、リラックスして、アタマを柔らかくして新しい発想が出てきやすい関係なのかな。ずっと集落におったら見えてこおへんことも多くて、移住者や関係人口との関わりの中で気付くこととか、斬新な情報が入ってきたりするよね。
「創る会」の今のメンバーも、そういう風にお互いに良い影響を与え合っていると思います。イベントうんぬんじゃなしに、みんなで「こんなんでいいん違う？」って話し合う時が結構楽しいんよね。集落の模型を作った時も、完成したものを見るのも勿論楽しいけど、一緒にみんなで手作りでやった過程が楽しかった。これからもそんな環境づくりをしたいね。子どもや女性にも「ここの地域はこんな楽しみがあるんや」と思ってもらえるようなことを継続してやっていけたらなあと思う。

▼移住者を迎える上での地域の課題についてはどのようにお考えですか？

もっと移住者の意見を聞きたいね。受け入れる準備が整ったと我々が思っても、実はそうじゃないかもしれない。その上で「創る会」や地域で共有することが必要やね。あとは家の問題は難しいね。空き家はあるけど実際は手放してくれないのが現実。これからは、例えば隣の集落に住みながら宇谷の町内会に入るみたいな、柔軟なルールづくりができれば良いけど、簡単ではないね。
よその地域でも同じような問題を抱えているはずやから、情報やアイデアの交換をしてヒントにしたいね。公会堂の環境が整ったし、今の時代オンラインでいくらかでも繋がれるから、どんどん情報を入れたという気持ちはあります。

▼移住者以外の方も含めた、これから宇谷に関わってくれる方に求めるものはありますか？

「創る会」のみんなは真剣に宇谷に向き合ってくれている。そう思ってくれるのは僕としてはほんまにもう、感動的に嬉しい。三崎君や塩田君、新庄君なんかを見ていると、屈託がなくて、上下関係も分かっているし、かといって僕のことを先輩みたいな扱いじゃなしに平等に話ができる子やし。同じような

人が来てくれれば全く申し分ないです。でもそこまで理想像はこうだと言う気もなく、助け合いのできる人であれば全然問題なく、来てほしいです。宇谷は心の広い人が多いから、不安要素は全くないと思う。みんな助けてくれると思う。

▼移住者に宇谷の農業を継いでほしいですか？

耕作放棄地をなくしたり、後継者になってほしい気持ちはあるけど生計を立てる必要もあるので、移住者にはぜひ農業を、とはあまり思わないかな。それよりも協調性とか、淡路に移住する理由や信念みたいなものの方が大事なかな？

▼最後に、移住を検討している方へのメッセージをお願いします。

質問の答えとは違う話だけれど、「創る会」の若い子らは「堂原さん、一緒に飲みましょうよ！」って言ってくれるんよね。僕との年齢差にとらわれることなく友達みたいな感覚で飲みましょうって言うてくれることがとても嬉しいです。とにかく、バカバカしいことも真面目なこともやっている楽しい地域です。ぜひリアル宇谷を体感してください！

インタビュー：濱田、上森（近畿大学野田研究室）

COLUMN | 知る人ぞ知る宇谷の象徴・ウダニマンは「宇谷のみらいを創る会」発足とほぼ時を同じくして生まれました。今後のプロモーションに注目です。

鮎原宇谷地区移住＆むらづくり読本

#移住＝単なる引越しでは無い
#移住者トラブルの原因の殆どは「暗黙の了解」関連
#良いことも悪いことも明文化
#情報の集約・共有・公開でトラブルを未然に防ぐ



移住を検討している方へ 先輩住民・先輩移住者へのインタビュー

プロフィール



あめつち農園
塩田宏紀（しおた・ひろき）さん
鮎原下地区在住



あめつち農園FACEBOOK

インタビュー：水上、大隅（近畿大学野田研究室）

インタビュー（2023. 03. 12実施）

▼農業を始めたきっかけは何だったのですか？
地元で車の板金塗装の仕事をしていたんですけど、3. 11があって東北にボランティアに行った時に現地の惨状を生で感じて、明日は我が身だし後悔のない人生にしたいと思ったのと、未来の世代に繋がるようなことをやりたいと思って。当時放射能の健康被害の問題があって、解決策を探してもなかなか見つからずにいたんですけど、とあるイベントで粕汁がケータリングで出ていて、食べてみるとあまりの野菜の美味しさに感動して。自然農法や有機農法の野菜を使っていると聞いて、早速調べてみると身体の自己免疫を上げるだけでなく、放射能被爆への対策としても使われていることを知って、自然農法で野菜づくりをしたい！と思い立ち、実家の近所で畑を借りて野菜づくりを始めました。そうすると農家さんと繋がりだして、とある農家が100人近く集まる会合に行った時、20年間有機の八百屋をやっていた人が後継者を探してて。板金塗装の仕事は健康にも悪いし、それに代わる仕事を探していたのでとりあえずやってみようってので八百屋をやりました！最初は大きい卸業社から野菜を引き取って阪神間で移動販売をやっていたんですけど、頼んだ野菜を仕入れた時に腐っていた時もあったりして。農家さんの想いを無駄にするような大量生産、流通の闇に気付いて、自分が直に農家さんのところに行って直接取引するやり方に変えました。その中で農家さんの高齢化による担い手の問題とかを知って…良い農家さんが自分の代で終わり、とか聞いたりして。もう売ってる場合じゃないなと（笑）。作る側に回らなって思ったのと元々お米作りをやりたい気持ちもあったから、本格的に農家になるため拠点探しを始めました。

▼移住の経緯について教えてください。
移住は2013年かな。さっき言った農家の繋がりの中で「宇谷のみらいを創る会」の新庄君とも出会って色々活動をしてたんですけど、そのうちに循環を根ざしたコミュニティを作りたいねって話になって、新庄君含め仲間四人で一年かけて全国を回って拠点探しをしてて。ある日縁あって淡路島に来たら、その後も縁が続いて淡路に来る機会が増える中で、花岡農恵園さんがFACEBOOKで研修先を募集している投稿を見つけて。もうドンビシャで「これや！」ってなってすぐ連絡して、働かせてもらうことになりました！でも初めは住む家が無かったのでも3月末から6月の間、友達の家泊めてもらったり車中泊したりして何とか過ごしていました（笑）。そして花岡さんに色々なツテ紹介してもらって家が何とか見つかり、鮎原に住み始めてって感じです！

▼宇谷に惹かれた理由は何だったのですか？
とにかく景色が素晴らしい！昔の棚田の風景が残っていて、山の上から見た西海岸や小豆島に沈む最高

の夕陽がバーンと見えたり、自然の豊かさや植生の多様性に惹かれてここ良いなってなって、花岡さんがもともと管理していた畑を譲ってもらうことになりました！僕は無農薬でやりたかったから、周りの影響が少ない土地っていうのも理由としてありました！あと今の田んぼって横にバルブがあって、開けたら水が出るシステムになっとるんですけど、ウチの田んぼは地堀の水路で、水が土の道通って田んぼに入るから臭くなくて純度が違うところも魅力でした！あとはやっぱり人があったかい！とにかく親切だから温度を感じる。そこが決定的。若い子の意見を聞いてくれるのが嬉しいし、集落のおじいちゃんおばあちゃんうちのおじいちゃんおばあちゃんぐらいフレンドリーで、昔話や武勇伝も面白い！

▼地酒「総達利（そうねり）」やしめ縄づくりを始めたのはどんな背景があったのですか？
鮎原の祭に祭礼団として参加させてもらって風習とか伝統の中にお酒は欠かせない大切なものということに気付いたのと、右も左も分からない自分を受け入れてくれた鮎原に恩を返したいというのがあって。ここで育ったお米で、みんなに愛されて飲んでもらえるお酒を奉納したいと思ったのがきっかけです。最初に3. 11の話したけど、東北の品種を作りたいと思って、福島の伝統品種のお米を取り寄せるために問い合わせるとその品種は震災で絶滅してしまっていて。何とかこちらで東北の品種を育てて種を継いで、またそういうことがあったら種を渡せるようにするために種を探していると、八百屋時代にお世話になった丹波の師匠農家さんが「亀の尾」を作っていました。調べてみると明治時代東北は酷い冷害に見舞われ農家が困窮していました。そんな中で亀の尾は冷害に強く、たくさん農家を救った米でこしひかりやササニシキの御先祖にあたる品種であり、漫画「夏子の酒」では廃蔵になりかけた酒蔵が希少種である亀の尾を復活させたことにより再建して、何度も想いを救ったというストーリーとかに惹かれ、そして食べれるだけでなく酒米としても使えるってことも分かり、種を譲ってもらいました！何とかお酒にできないかと思っていると、室津の高田酒店を紹介してもらい、経緯を話したら「都美人に話すわ！」と早速電話してくださり、販売元としても協力していただいでできあがったのが総達利です。しめ縄もこの話と地続きで、この品種は穂が長くて柔らかいからしめ縄にも向いてて、お米作りの可能性を拓ける一環としてやりたいと思っていました。葛尾にある龍宝寺という寺で大しめ縄作りに参加して、作り方を学び本格的にやろうってなりました。宇谷でしめ縄作り体験をやっていると、鮎原の氏神である河上神社のしめ縄作りやられていた方が亡くなってしまい、体験会に参加してくれた方が僕の事を紹介してくださり、今年から河上神社にもしめ縄

を納めることになりました。ただお米を売って生計を立てるってやり方じゃなくて、市場から外れた価値観がこれからは必要だと思いい、その可能性を探る一環でお酒とかしめ縄とか色々試しながら、自分の柱にしたいな。

▼住居探しの時は苦労しましたか？
今は鮎原の下村に住んでいて、元々は宇谷の畑の近くに住みたかったのだけど、空き家はあるんですけど色んな理由で入れないパターンが結構多くて。自分もこれまでに2回家変わってるんですけど、3年かけてまともに住めるようになったって感じやね。やっぱり移住者にとって家問題はネックかな。特に五色町は移住者に人気の激戦区っていうのもあるやろね。俺も今の家まで3年ぐらいかかったし、家がすぐ見つかるかどうかは何とも言えんね。

▼移住者の仕事についてはいかがでしょうか？
結構色々あって、農作業は沢山あるし、山の仕事で呼ばれたりもするし。最近の移住者は手に職持っている人も多いやろうから、仕事に困ることはあんまりないんじゃないかな。俺は農業って絞ってたから、農業に活きるようなバイトをやったりとか。やっぱり目的をちゃんと持った方が良いってのはあるね。沢山の縁があるから、自分はこれをやりたい、こうなりたいたいのがあれば、繋がる仕事はあると思う。

▼先ほどの話とも関連しますが、地元の方との関わりについてお伺いします。
鮎原の人は親切で、担い手が足りないっていう問題意識もかなりあるから、今の家に住めてるのも地元の人のおかげやし。花岡さんのところで働いててありがたかったなと思うのは、仕事の中で田主の草刈りとか、地元との関わりを作ってくれたのが良かった。その中で田んぼとか農機具を貸してもらえたり。色々な人はいるけど、この辺は基本移住者には親切やね。宇谷も同じで、優しいしアツい人が多い。あと体力が異次元（笑）。

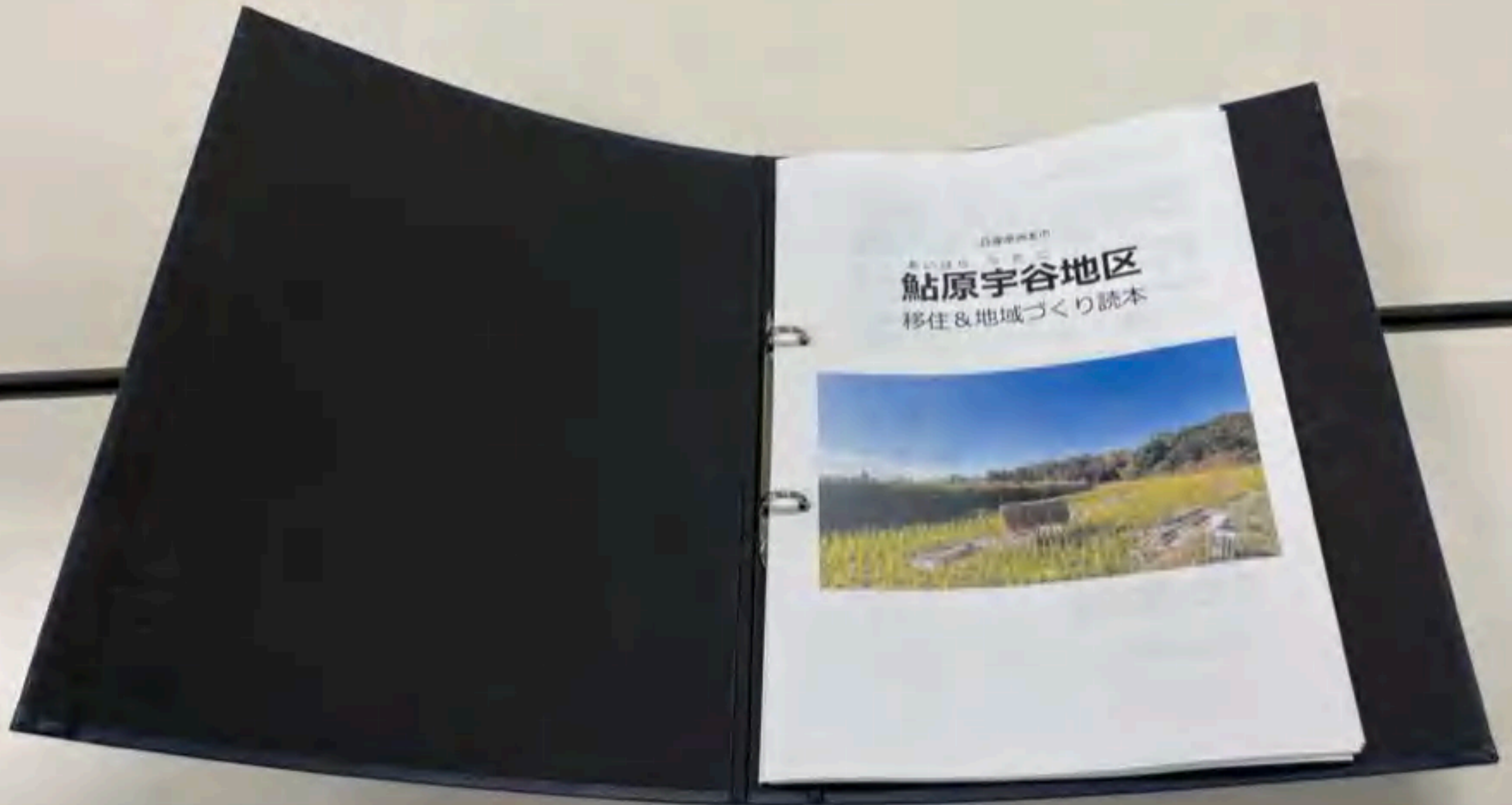
▼今後、宇谷でやりたいことはありますか？
宇谷は放置竹林と獣害が本当に問題で、めっちゃ大変で。電柵なしでも農業ができるように今の時代に合った里山のラインを作っていきたい。鮎原は祭りや伝統風習によって人と山の棲み分けをしてきた歴史がある。僕らが生きているうちに更新できたら新たな伝統として後世に伝えていけるんじゃないかな。

▼最後に、移住を検討している方へのメッセージをお願いします。
宇谷、マジ、サイコー！田んぼしたい方ぜひ来てくださーいーい！

COLUMN | インターネットのみならずプロジェクター＆スクリーン完備の公会堂では、これから様々な企画が行われる予定です。

鮎原宇谷地区移住&むらづくり読本

#移住＝単なる引越しではない
#移住者トラブルの原因の殆どは「暗黙の了解」関連
#良いことも悪いことも明文化
#情報の集約・共有・公開でトラブルを未然に防ぐ



撮影 | 野田満：大阪府東大阪市、2023.03

大学は青春集団か、セミプロ集団か

域学連携の検討/持続にあたっての要点

■地域

- ・地域づくりの中長期的ビジョン設定
- ・長期投資/短期投資の認識に基づく大学/行政へのニーズ発信
- ・各大学（或いは各教員）のスタンスや専門領域、系統への理解と見極め
- ・実効性ある地域づくりに向けた大学（学生）のマネジメントと評価
- ・インフォーマルかつ継続的な関係構築に向けた「口実のデザイン」

■大学（教員）

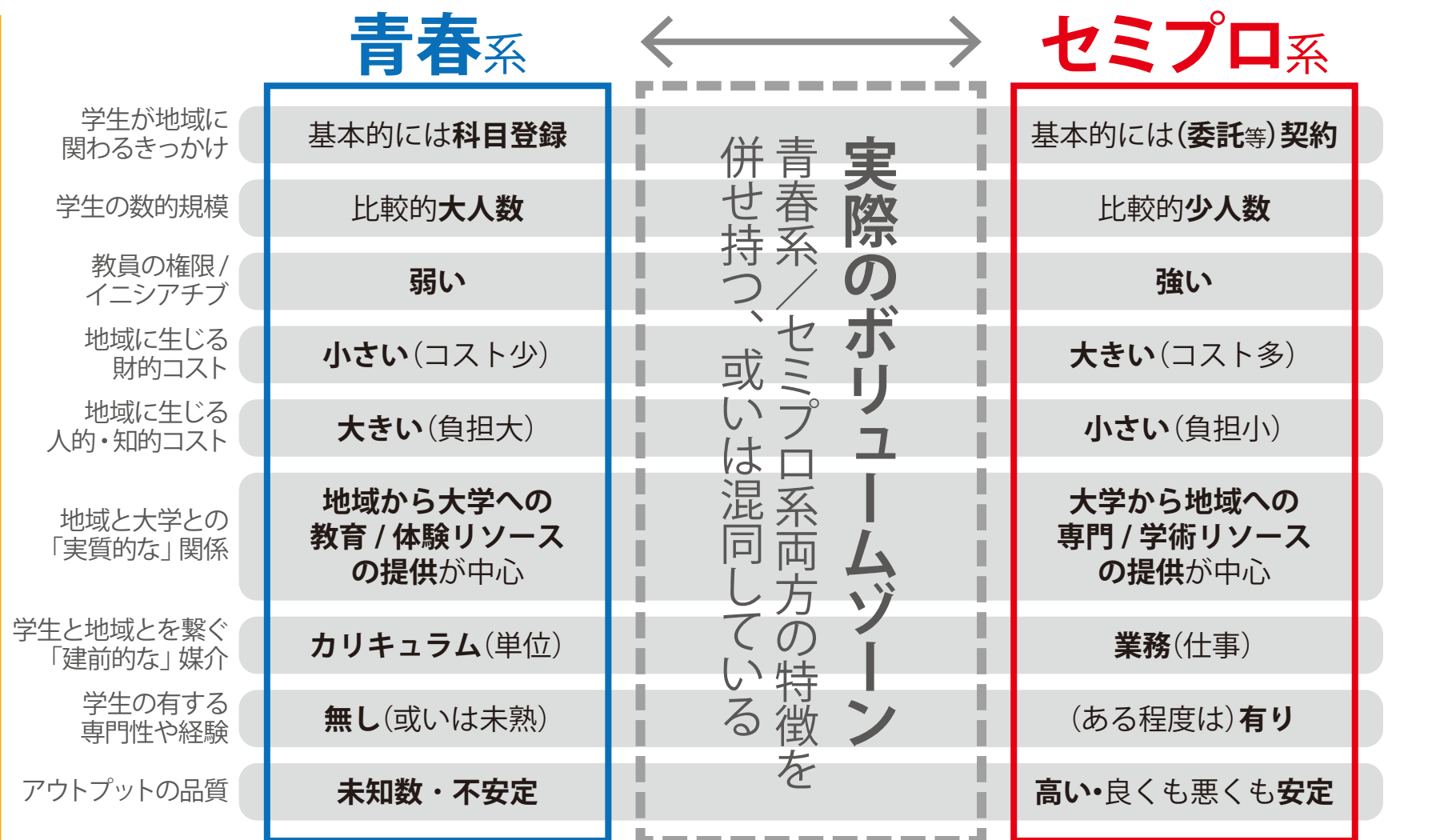
- ・大学単位ではなく活動ユニット単位の性格付けと具体的なシーズ発信
- ・客観的指標に基づいた域学連携の正負の成果検証と理論化、KPI設定等の提言
- ・地域づくりの自律的運営に向けた積極的な「卒業（撤退）のデザイン」

■行政（或いはコーディネーター）

- ・長期投資の意義への理解
- ・両者のニーズ/シーズの整理と適切なマッチング
- ・公的支援等による地域/大学双方へのチャレンジ機会の提供「挑戦のデザイン」

■共通

- ・地域づくりの方向性、手段と目的、事業の時空間単位等を踏まえた「連携」概念への共通理解
- ・事業監査を通した「緊張感のデザイン」
- ・OBOGへの積極的な情報発信



長期投資の域学連携 →OBOGの「嬉しい誤算」に期待

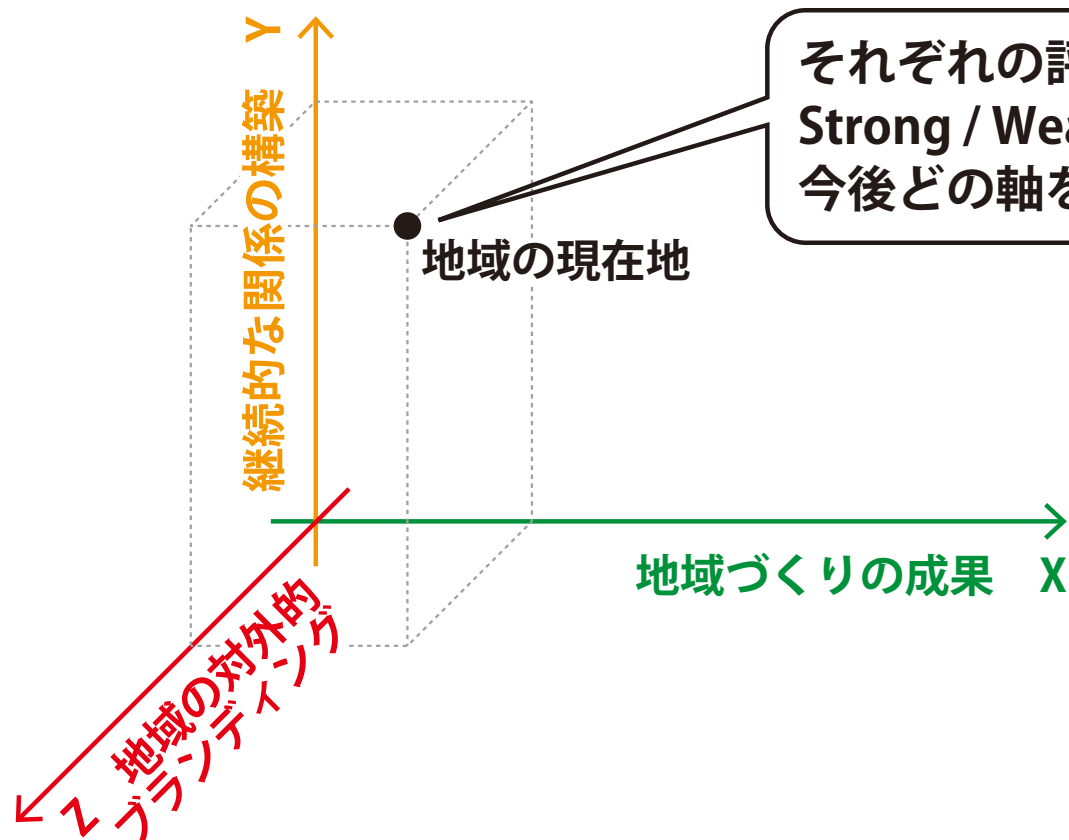
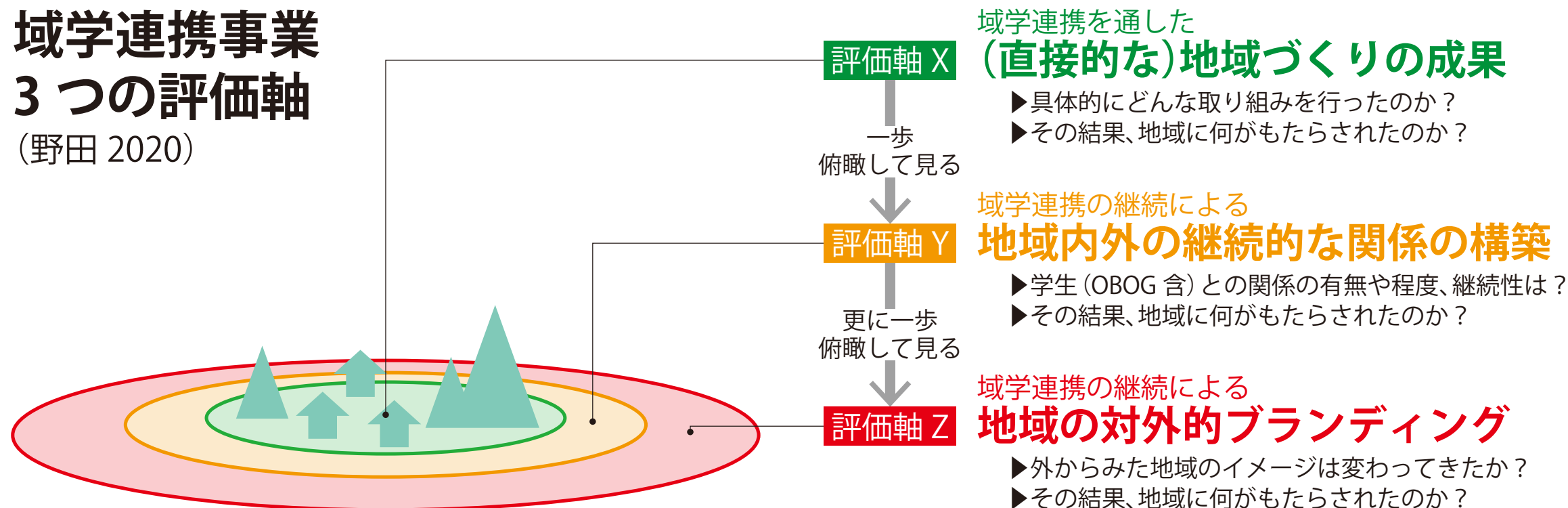
主に授業の一環で学生が地域に関わるケース。必然的に学生のモチベーションのばらつきが大きく、教員が舵取りし切れないケースも多い為、地域は何かと予測不能な負担を強いられることとなる。その反動としての、マンネリ化のリスクも高い。しかし数的規模による瞬間最大風速と潜在性は侮れず、些細な契機で地域との継続的な繋がりが生まれ、結果的に活動のアップデートや移住に繋がる可能性も十二分に有している。
具体的成果の有無に関わらず、大学の関与や交流そのものが目的化しないよう、両者が常に一定の緊張感を持ち、実験と内省を繰り返しながら辛抱強く取り組みを継続していくことが重要である。

短期投資の域学連携 →事業そのものの成果に期待

委託契約や共同研究等を通して学生が地域に関わるケース。専任教員をトップとした準専門家集団という意味合いが強い為、高いパフォーマンスが期待できる一方、契約の切れ目が縁の切れ目という、ドライな関係に終始することも多い。
「コスト多」であるものの民間企業に比べると単価は安い。しかしそれなら地元の民間企業に委託して域内経済を潤す方が健全なのかもしれない。
受け入れる地域や団体に端的なミッションがあり、「どの部分を託すか」が明確であれば、単年度契約やプロジェクト単位での関与等、ピンポイントでの関わりを前提に「青春系」からこちらに切り替えることも選択肢に入れるべきであろう。

域学連携は「立体的」評価が重要

域学連携事業 3つの評価軸 (野田 2020)



それぞれの評価軸でみた地域の現在地はどこか？
Strong / Weak Point はどの軸か？
今後どの軸を意識して取り組みを進めていくか？

目先の成果だけに
捉われることなく
立体的(俯瞰的/長期的)評価を

■ 域学連携の良し悪しを議論する時「どの評価軸で評価しているか」
が一致していないと建設的な結論に至らない

※事業評価のみならず地域と大学とのマッチングや、事業の継続
/ 撤退の判断も同様

■ XYZ は (ゆるい相関ぐらいはありそうだが) 独立した変数である
※X の結果がさっぱりでも地域は Y・Z で十分な便益を獲得して
いるケースも起こり得る
(だからといって X をサボっても良いという訳ではない)

域学連携雑感とディスカッションに向けた論点

1) “三世代目”の域学連携 早稲田大（学生）→ 都立大（教員）→ 近畿大（教員）

- ・プロジェクトや地域との関係性の引継、去り際のデザイン
- ・OBOGにとって何が縁（よすが）に成り得るか／仕事として関わること

2) ミッションの組み立て方と学生の専門性

- ・地域が明確な「お題」を提示することの是非、交流疲れ／連携疲れ
- ・大学生への幻想と可能性を待つことの功罪、地域とのスタンスのズレ
- ・年度の切れ目が縁の切れ目（それはそれで大事ではある）

3) 域学連携の成果とは

- ・何をやるかではなく「何の為にやるか」についての議論の欠如
- ・否定しようの無い「交流の霧」問題／どこまでドライになれるか（なるべきか）

4) 改めて、大学（教員）の役割

- ・大学は本来、研究成果で地域社会を支えるべき機関（域学連携は社会実験？）
- ・4年間（或いはもっと短期）の新陳代謝を考える（いっそ世代を固定すべき？）